

特集 試される宗教リテラシー

クルアーンの翻訳にまつわるリテラシー

—「正確さ」と「客観性」から考える—

後藤絵美¹

イスラームの啓典クルアーンの翻訳を参照したり、引用したりする際に、何を知っておくべきか。本稿では、人間の営為としての翻訳がもつ、「正確さ」や「客観性」にまつわる限界と、解釈の「幅」や「可能性」の広がりについて論じる。

¹ ごとうえみ：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教

1. 翻訳の困難と課題

イスラームの啓典クルアーンには複数の日本語訳があるという話をすると、しばしば問われるのが、「どの翻訳が一番正確か」という点である。中には、信徒以外の学者の翻訳の方が、価値中立で、客観的で、信頼に足るのではないかと尋ねる人もいる。本稿では、こうした問いをきっかけに、クルアーンの翻訳を参照したり、引用したりする際に、何を知っておくべきか、あるいは、考える必要があるのかを論じてみたい。

クルアーンはムスリム（イスラーム教徒）にとって、神の言葉そのものを記録した書物である。それは、7世紀のアラビア半島で「最後の預言者」に選ばれたムハンマドを通して人々に伝えられ、後に書き留められたものとされる。クルアーンの言語はアラビア語で、そのことは同書の中でも言及されている¹⁾。

ムスリムの間で、クルアーンを別の言語に翻訳したものは、クルアーンそのものではなく、その解釈書だと考えられてきた。翻訳（他言語での解釈）は、イスラームがアラビア語話者以外のあいだで知られるようになるにつれて必要になった。すでに預言者ムハンマドの時代に、一部の章句が、ペルシア語や、シリア語、シンド語などに翻訳されていたと言われる。ムスリム王朝が栄えるにつれて、クルアーン全体のペルシア語やトルコ語への翻訳も盛んになった。また、植民地主義の広がりや西洋（キリスト教）の思想や文化の流入が急速に進んだ19世紀には、中央アジアや南アジア、東南アジア、中国、アフリカなど、アラビア語以外の言語圏に暮らす信徒たちの信仰が揺らがないよう、各地のムスリムがそれぞれの言語による翻訳書を著し、刊行し始めた。

信徒以外の手による翻訳も行われてきた。ヨーロッパ諸語への最初の翻訳は、1143年、イングランドのキリスト教徒によるラテン語訳だったと言われる。その後、1547年に最初のイタリア語訳が登場し、ドイツ語訳（1616年、イタリア語訳より翻訳）、オランダ語訳（1641年、ドイツ語訳より翻訳）、フランス語訳（1647年、アラビア語より翻訳）、英語訳（1648年、フランス語訳より翻訳）が続いた。19世紀になると、

キリスト教宣教師や東洋学者らによるクルアーンの翻訳が次々と出された。中にはイスラームへの偏見に満ちたものもあったが、真摯な学術的取り組みとしてなされたものも少なくなかった。

日本語では、非信徒の歴史家、坂本健一による『コーラン経』（「世界聖典全集」所収、1920年）が最初の翻訳として知られている。続いて刊行されたのが、最初期の日本人ムスリムの一人である有賀阿馬士（文八郎）と、聖書の翻訳を行ったことで知られる文学者の高橋五郎の共訳『聖香蘭経』（1938年）であった。以来、信徒や信徒以外の人々の手によって、十種類以上のクルアーンの日本語訳が刊行されてきた（表）。その大半は、翻訳者の学術的・宗教的関心に基づき、ムスリムの人々が大切にする「啓典」の内容を、人口の大多数を占めるムスリム以外の人々を含む、日本語の読者に伝えようとするものであった。

冒頭の問いに戻ろう。日本語の翻訳のうち、どれがより「正確」なのか。信徒以外の学者の手による翻訳の方が「客観的」なのか。あらかじめ筆者の考えを示すと、クルアーンのある翻訳が他の翻訳よりも正確であるとか、客観的であるという判断は、そもそも不可能である。翻訳とは、原文をできるだけ忠実に別の言語に移し替えようとする試みであるが、その作業には多くの困難が伴う。その点で、フランス思想研究者の桑田禮彰が翻訳について述べていることは、クルアーンの場合にもあてはまるであろう。

翻訳者は、あくまでも原典に忠実に、原著者が意図したこと、表現しようとしたことを探求し、その背景・環境を調べ尽くして、正確な翻訳を行なわなければならない。しかし実際には翻訳者は、理解・表現の困難や複数の解釈可能性の問題に遭遇する。その場合には翻訳者は、しかるべき専門家の協力を仰ぎ、最終的な出版に際しては自らの限界を自覚した上で、自分の翻訳を一つの解釈として謙虚に提示し、「諸兄のご教示・ご批判を仰ぐ」ことになる²⁾。

クルアーンを翻訳する者は、いかに原著者（アッラー）の言葉とされ

表 クルアーンの日本語訳(全訳のみ、2019年刊行分まで)

	訳者名 書名	出版年	訳出の際、主に参照したもの
1	坂本健一 『コーラン経』	1920年 (大正9年)	原典および英語訳(セール(1734)、ロッドウエル(1861)、パーマー(1880))
2	高橋五郎・有賀阿馬土 『聖香蘭経』	1938年 (昭和13年)	英語訳(おそらくロッドウエル(1861)のもの)
3	大川周明 『古蘭』	1950年 (昭和25年)	原典および漢語、英語、仏語、独語の諸訳
4	井筒俊彦 『コーラン』	1957-58年 (昭和32-33年) ／改訂1964年 (昭和39年)	原典、バイダーウィーの注釈書
5	藤本勝次・伴康哉・池田修 『コーラン』	1970年 (昭和45年)	原典、英語訳(ユスフ・アリ)
6	三田了一 『日亜対訳注解 聖クラーン』／ 日本ムスリム協会 『日亜対訳注解 聖クルアーン』	1972年 (昭和47年) ／改訂1982年 (昭和57年)	原典、アブドゥル・ラシッド・アルシャッドによる講義、19世紀インドの英語訳(アブドゥル・マージド、ユスフ・アリ)
7	モハマッド・オウエース・小林淳 『聖クルアーン』	1988年 (昭和63年)	不明
8	中田考監修、中田香織・ 下村佳州紀訳『訳解クルアーン』／ 『日亜対訳クルアーン』	2011年 (平成23年) ／2014年 (平成26年)	原典、ジャラーライン(マハッリーとスューティー)の注釈書、古典および現代の注釈書
9	澤田達一 『聖クルアーン』	2013年 (平成25年)	原典、アラビア語の注釈書(現代シリア派)、三田訳
10	水谷周監訳著 杉本恭一郎訳補完 『クルアーン やさしい和訳』	2019年 (平成31年)	原典、ラーズィーの注釈書、バダウィーとアブデル・ハリームによるクルアーン用語辞書
11	サイド佐藤 『聖クルアーン』	2019年 (平成31年)	原典、ムヤッサルの注釈書、古典および現代の注釈書

るものの背景や周辺について調べようと、それを理解したり、他言語で表現したりする際には困難にぶつかり、複数の解釈可能性の問題に直面する。結局、その過程には、人間の主観的な選択や判断が入らざるを得ず、自らの翻訳を「一つの解釈」として提示するほかない。

本稿では、こうした状況について、日本で長らくクルアーンの翻訳の

「定本」とも言うべき位置を占めてきた二つの翻訳書を事例に見ていきたい。一つは井筒俊彦訳『コーラン』である。1957年から58年にかけて岩波文庫から刊行され、1964年に改訂された同書は、日本で最初のアラビア語からの完訳として知られ、非ムスリムの学者による学術的翻訳書としても名高い。もう一つは三田了一訳『日亜対訳注解 聖クラーン』／日本ムスリム協会訳『日亜対訳注解 聖クルアーン』である。こちらは、日本で最初の信徒によるアラビア語からの完訳として知られている。1972年に三田が刊行した初版は、1982年に日本ムスリム協会によって改訂され、その後、版や刷を重ねている。

本稿の構成は以下の通りである。続く第2節では、二つの翻訳書が、どのような意図の上に、いかなる過程を経て生み出されたのか、第3節では、その結果、いかなる日本語の訳文があらわれたのか、現存する翻訳の「幅」を、それぞれ見ていく。第4節では、近年、世界の各地で、これまで以上に多様なクルアーンの見方が示されてきたことを指摘し、いまだ日本語の翻訳にはあらわれていない読み方のいくつかを紹介する。

以上の作業を通して、クルアーンの翻訳を参照したり、引用したりする際に必要なリテラシーのいくつかの側面に光をあてていきたい。

2. 翻訳が生まれるまで

本節では、井筒訳と三田／日本ムスリム協会訳という二つの日本語訳がどのような意図の上に、どのような過程を経てなされたのかを見ていく。

井筒訳『コーラン』

井筒俊彦(1914-93年)は言語学者、哲学者であり、戦後日本を代表するイスラームの研究者の一人である。井筒がクルアーンの翻訳に着手したのは、1940年代末、岩波文庫の編集者の依頼を受けてのことであった。1957年から58年にかけて上中下の三巻本で刊行された翻訳の初版

解説で、井筒は、クルアーンが「西アジアから東南アジアにかけて数億の信者を擁する」イスラームの根元であること、今も昔も「信徒の狂熱的尊信を一つに集め、その生活の諸相を規定し、彼らの思想・感情の生きた源泉をなして」きたことを指摘し、日本においても、この啓典を「一寸読んでみたいと言う人が各方面で非常に多くなって来た」と記している³⁾。

その上で、同じ唯一神に由来するとされる旧約聖書や新約聖書と比べて、クルアーンは日本人にとって理解が難しく、無味乾燥で退屈なものにもなりかねないとも述べている。クルアーンを面白く読むためには、一定の技術——つまり、いくつかの予備知識を用意しておくこと——が必要だからである。たとえば、『コーラン』は何時、何処で、そして特にどんな歴史的状況の下に生れたものか。その頃の沙漠のアラビア人はどんな世界像を抱いて生きていたか。『コーラン』の生みの親であるムハンマド(中略)とは一体どんな男であったのか。『コーラン』というこの書物はどんな径路で出来上ったのか。どんな点がユダヤ教、キリスト教の聖典と根本的に違っているのか、等々⁴⁾である。その一方で、ともかく、じかに啓示の言葉を読んでみることも、理解への道筋の一つであるとも付け加えている。そして、この翻訳は、「少くとも一歩一歩読んで行く、その箇所が一体何を言っているのか表面的になりとも分かるように、割注を随所に入れながら、言葉の意味や、全体の脈略が辿れるようにしたと述べている⁵⁾。

上巻の「はしがき」には、翻訳に際して、19世紀ヨーロッパの東洋学者グスタフ・フリーゲル(1812-1900年)によるクルアーンの校訂本を底本とし、語句の解釈には、バイダーウィー(生年不詳-1286年)の注釈書をもって基調としたという説明がある。井筒によれば、1841年に出版されたフリーゲル版は「最初の学術的テキスト」であり、フリーゲルは「当時ヨーロッパきっての碩学として令名のあった」人物である。またバイダーウィーは西暦13世紀のクルアーン学者であり、その注釈書は「回教の正統派では最上のも^{スニユー}物として非常に尊重されて来た」という。ただし、この注釈書も、19世紀以降のアラビア文献学の

知識に照らし合わせると「無数の欠陥を蔵しており、すべての点についてこれに盲従することは到底不可能」として、後者の成果も活用したと述べている。そして全体として「いかなる場合にも、あまり大胆すぎるような仮説は採用せず、できるだけアラビア語を良識的に、平易に、解釈するよう努力したつもりである」と記している⁶⁾。

井筒訳の特徴はそれが「口語訳」だったということである。クルアーンは神がムハンマドを通して人々に伝えた言葉の記録だとされるが、井筒は口語訳を用いることで、ムハンマドが発話した瞬間を、できるかぎり生々しく再現してみたかったと言う⁷⁾。信徒にとってクルアーンは「聖なるが上にも聖なる啓典」であるが、大半が「異教徒」である日本人にとって、それは「ユニークな人間記録」、あるいは歴史文献として高い価値を持ちうると井筒は述べている⁸⁾。彼が参照したバイダーウィーの注釈書は、アラビア語学の分野で著名なザマフシャーリー（1075-1144年）の注釈書を要約・修正したものとして知られている⁹⁾。井筒がバイダーウィーの注釈書とともにヨーロッパの文献学の成果を活用することを選んだのは、それが言語学的アプローチによる解釈をするものだったからだと考えられる。アラビア語の文法、語彙、修辞表現を詳細に検証することで、啓示当時のクルアーンの「本来の」意味を再現しようとしたバイダーウィーや文献学者らの試みは、井筒の目的と合致していたのである¹⁰⁾。

井筒が1964年にかけて全面的な改訳を行ったのは、初版の口語訳の文体がクルアーンにそぐわないという思いがあったことに加えて、「アラブ諸国、特にエジプトのカイロで斯界の権威とされる多くの碩学と論議して」新しい知識を得たからであるという¹¹⁾。学者らが一字一句の解釈に真剣に取り組む様子、そしてそこに多様な解釈があらわれる様子を目のあたりにしたのであろうか、井筒は「改訳『コーラン』後記」の中で次のように記している。

『コーラン』の一字一句が^{アッラー}神自らの言葉であるからには、その
 唯一の正しい意味を解釈し、それを通じて神の意の奈辺にあるかを

探り出すことは、信徒たるものの神聖な義務とされたのである。学者は一字一句の解釈に自己の生死を賭した。(中略)しかし皮肉なことに、ひたすら唯一なる正しい解釈を求めるのゆえに、実に多くの解釈が考え出される結果となった。かくて伝統的に記録された異なる解釈の仕方は膨大な数にのぼる。(中略)大抵の語句については幾つかの違った解釈——しかも屢々あい矛盾する解釈——が提出されている。同一の語句が五通り六通りに解されることはざらであり、そのいずれに依るかによって訳もまた全然違ったものになる。このような場合、いずれを正しいとするかは大変むずかしい問題である。すなわち、そこに訳者の個人的主観的評価が入ることを避けることはできない¹²⁾。

表現の難しさに加えて解釈の複数性、そして主観的な取捨選択の存在を十分に認識しつつ、井筒は、改訳の際にも「最も良識的で受け入れやすい解釈を採用するという原則」の上に作業を進めたという¹³⁾。それでも、自らの訳文について、「絶対的确实性の保証はあり得ない。一応筋の通った解釈を一応首尾一貫した形で提供したにすぎない¹⁴⁾」と述べていたのであった。

三田訳『聖クラーン』／日本ムスリム協会訳『聖クルアーン』

三田了一(1892-1983)は、20代半ばで渡航した中国での滞在中にイスラームとの接触の機会をもち、同地の信徒らの生活や人間性、宗教に対する忠誠心に深く感銘を受けたという。後に彼は南満州鉄道社員として中国各地を訪れ、回教研究にいそしんだ。三田が北京のモスクで仏教からイスラームに改宗したのは1941年、49歳の時である。戦後、日本に戻った彼は、1952年に設立されたばかりの日本ムスリム協会に入会し、1950年代から1960年代にかけては、タブリーギー・ジャマーアートと協力して、日本でムスリム布教活動に従事した。1960年、68歳で日本ムスリム協会の第二代会長に就任したが、その2年後に辞任し、クルアーンの翻訳に専念するため、パキスタンやサウジアラビアに渡り、

現地の学者たちの指導を受けた。三田が10年以上かけて完成させたのが、『日亜対訳注解 聖クラーン』（1972年、以下『聖クラーン』）であった¹⁵⁾。

翻訳のきっかけや意図について『聖クラーン』には言及がないが、アラビア語のクルアーン原文と日本語の翻訳を左右に並べて併記する対訳の形をとり、かつ、前者には母音符号に加えて、朗読のための記号が詳しく付されたものを使用していることから、日本語を母語とする信徒の日々の活用が意識されていたものと思われる。この形式であれば、信徒はアラビア語を声に出して朗読しながら、日本語の意味を理解しうるからである。一方、巻頭に置かれた解説には、「クラーンを初めて読む方へ」という項目があり、信徒の中でも初学者や、信徒以外の読者も想定されていたことがうかがえる。ここには、たとえば次のような言葉がある。

クラーンが啓示される当時の緊迫した事情や、民族慣習などからくる疑問に感じた点は、それぞれ重大な問題ではあるが、もし納得しかなる点があったさいはしばらくそれをおき、ひとまず全巻を通読して、クラーンの基本的教えや精神のあるところを理解せられたい。先入主や表面上の現われや一部の語句に捕われると、誤解に陥るおそれがある。(中略)しょせん人間のとらわれた読み方では、神のことばを理解することはむずかしい¹⁶⁾。

地域的・時代的な文脈に馴染みのない日本語読者が少しでも背景を知った上で読めるようにと、三田訳では、各章の冒頭に、章全体の内容に関する説明が付され、またいくつかの語句や文章に訳注が振られている。訳文や注記を作成するにあたり、三田が主に依拠したのは、パキスタンの学者アブドゥル・ラシッド・アルシャッドの講義と、内外の既刊の翻訳書であった。前者の講義はサウジアラビアのメッカで、1963年12月から2年以上にわたり、三田による翻訳作成のために行われたものだという。また、翻訳書としては、19世紀のインド大陸の二つの英亜対訳書——マウラナ・アブドゥル・マージドとユスフ・アリのものが

主に用いられた。加えて、三田は「メッカの諸権威者」や世界各地のムスリムやイスラーム研究者と、疑問点について協議したり、彼らに翻訳書の校閲を依頼したりした¹⁷⁾。

『聖クラーン』の刊行後、そのアラビア語の印刷部分に不備が見つかったことをきっかけに、日本ムスリム協会のメンバーによる改訂版の作成が始まった。協会の中でもエジプトやサウジアラビアに留学経験のある者が、三田訳をもとに、あらためて内容の確認や訳文の訂正を行い、浮上した疑問点については、国内外の専門家らの意見を仰いだ。多くの人の目や手が入り、推敲と校正を重ねて、『日亜対訳注解 聖クルアーン』（1982年）が刊行され、1996年にはさらなる修正が施された改訂版が出版された。

三田／日本ムスリム協会訳は、先行する井筒訳と内容やニュアンスの面で異なる部分が少なくない。それは、井筒訳が7世紀当時の啓示の瞬間を日本語で再現しようと試みたのに対して、三田／日本ムスリム協会訳は、神の啓示であるクルアーンを、現代に暮らす人々の生活に結び付けようとするものだったからである。初版の『聖クラーン』の発行に携わった日訳クラーン刊行会による「まえがき」には、次のような言葉がある。

クラーンは、永遠にゆるがない真理、神のことが納められた、イスラームの唯一の聖典である。それは、一見解や一民族に偏することなく、全人類に共通し万世にもとることのない直き道が、日常生活上の万般の事項にわたり、一神の信仰を基底に具体的かつ懇切に生き生きと説かれ、六億数千万人の信徒によって信奉されている¹⁸⁾。

クルアーンは7世紀のアラビア半島において下された啓示であるが、その真理はいつの時代にも、そしてあらゆる人々の日々にかかわるものであるという。しかし、それを（もともとの）アラビア語以外の言語に置き換えることについては、三田や日本ムスリム協会による序文や解説の中で、その限界が繰り返し強調されている。クルアーンとは「独特の書で、普通の読み物とは全く異り（中略）永遠にゆるぎのないアルラー

のことばを、人間の語で表現することはもともと不可能」なのである¹⁹⁾。それでもより多くの人々が、クルアーンを読み、考え、神意を会得し、それを日常生活の上に生かしていくことを求めて、日本語による翻訳の努力が重ねられてきたのであった。

3. 翻訳の「幅」

ここまで、二つの翻訳の意図や方針を概観したが、次に、それらによって、いかなる訳文が生み出されてきたのかを見ていくことにしたい。ここでは、井筒訳(1964年改訳版)²⁰⁾と日本ムスリム協会訳(1996年改訳版)²¹⁾を参照し、二つの違いが大きく表れる第四章「女性章 *Sūrat al-Nisā'*」(井筒訳では「女章」、日本ムスリム協会訳では「婦人章」)を取り上げる。

「女性章」には、家庭や社会における男女の関係性を扱う節が多く含まれる。井筒訳では、章題のすぐ後にバスマラ(各章の冒頭に置かれる一文)²²⁾が置かれ、その後、第一節から順に訳文が並ぶが、日本ムスリム協会訳では、章の冒頭に「章の説明」として次のような言葉がある。

本章は婦人に関する啓示が多いので、婦人章と名付けられる。啓示の年代は3章に続き、その大部分はオホドの戦役後、74名に及ぶ戦死者によって生じた寡婦〈かふ〉の結婚、離婚、遺産相続ならびに孤児の保護など、主としてこれら当面の問題に関する啓示である。戦後の收拾のために下った啓示が、後年に至るまでムスリムの日常を律するものとなった。(後略)²³⁾

「オホドの戦役」(ウフドの戦い)とは、625年に起きたとされるもので、メディナのムハンマド軍がメッカのクライシュ族と戦い、前者が大きな痛手を負ったことで知られている。その中で多くの男性が命を落とし、それによって寡婦や孤児が生まれた。一夫多妻婚に関する章句として知られる4章3節は、そうした時期に下されたものだと言われている。

協会訳は説明する。一方、井筒訳にはそうした文脈への言及がない²⁴⁾。同節は二つの訳書において、それぞれ、以下のように翻訳されている。

[井筒訳]

もし汝ら（自分だけでは）孤児に公正にしてやれそうもないと思ったら、誰か気に入った女をめとるがよい、二人なり、三人なり、四人なり。だがもし（妻が多くては）公平にできないようならば一人だけにしておくか、さもなくばお前たちの右手が所有しているもの（女奴隷を指す）だけで我慢しておけ。その方が片手落ちになる心配が少なくてすむ²⁵⁾。

[日本ムスリム協会訳]

あなたがたがもし孤児に対し、公正にしてやれそうにもないならば、あなたがたがよいと思う2人、3人または4人の女を娶れ¹⁾。だが公平にしてやれそうにもないならば、只1人だけ（娶るか）、またはあなたがたの右手が所有する者（奴隷の女）で我慢しておきなさい。このことは不公正を避けるため、もっとも公正である²⁶⁾。

日本ムスリム協会訳には、「2人、3人、または4人の女を娶れ」の後に訳注1として、三田による次のような解説が付されている。「オホドの戦役において、7百人のムスリム軍の中から74名の戦死者を出し、多くの孤児と寡婦〈かふ〉の救済は、当時の社会では至難の問題であった。一般にイスラームの多妻につき、本節に述べられる前段と後段の条件が無視されているのは遺憾である。イスラームの精神は、この文面からも明らかかなように一夫一婦であり、またムスリム社会の現実もそうである²⁷⁾。」

一部の言葉が括弧の中に補足された形の井筒訳と比べると、日本ムスリム協会訳は情報量が多い。第一に、多くの男性が戦死し、その結果、孤児と寡婦の救済が社会問題となったという文脈が示され、第二に「前段と後段の条件」、すなわち、「孤児に対し、公正にしてやれそうにもないならば」と「だが公平にしてやれそうにもないならば、只1人だけ」

という二つの条件の上に、4人までの妻帯が許されていることが指摘されている。そうして、イスラームの初期史に詳しくない日本の読者に向けて、三田は啓示の文脈を提示した上で、第三に、イスラームの精神においては、もともと一夫一婦であり、現代のムスリム社会の現実もそうであると付け加えたのである。

もう一つ、翻訳の違いが顕著な例として、男女の役割や関係性について説く4章34節（井筒訳では38節）²⁸⁾を挙げておこう。

[井筒訳]

アッラーはもともと男と（女）との間には優劣をおつけになったのだし、また（生活に必要な）金は男が出すのだから、この点で男の方が女の上に立つべきもの。だから貞淑な女は（男にたいして）ひたすら従順に、またアッラーが大切に守って下さる（夫婦間の）秘めごとを他人に知られぬようそっと守ることが肝要（この一文には色々な解釈の可能性がある）。反抗的になりそうな心配のある女はよく諭し、（それでも駄目なら）寢床に追いやって（こらしめ、それも効がない場合は）打擲を加えるもよい。だが、それで言うことをきくようなら、それ以上のことをしようとしてはならぬ。アッラーはいと高く、いとも偉大におわします²⁹⁾。

[日本ムスリム協会訳]

男は女の擁護者（家長）である。それはアッラーが、一方を他よりも強くなされ、かれらが自分の財産から（扶養するため）、経費を出すためである。それで貞節な女は従順に、アッラーの守護の下に（夫の）不在中を守る。あなたがたが、不忠実、不行跡の心配のある女たちには諭し、それでもだめならこれを臥所に置き去りにし、それでも効きめがなければこれを打て。それで言うことを聞くようならばかの女に対して（それ以上の）ことをしてはならない¹¹⁾。本当にアッラーは極めて高く偉大であられる³⁰⁾。

二つの訳文は、男女関係や夫婦関係のあり方という点で違いがある。井筒訳では、男女の優劣が神授のものとされ、女性は生活を支える夫の下で「ひたすら従順に」あるべきだとある。他方、日本ムスリム協会訳は、男女間には「強さ」と「経費を出すか出さないか」という二つの違いがあるという。井筒訳が男性の圧倒的優位を強調し、日本ムスリム協会訳がより平等意識の強い訳を示したのは、前者が13世紀のバイダーウィーの注釈書を基調として訳出を行った一方で、後者が19世紀の英語の訳本や20世紀のパキスタンの学者の講義をもとにしたという、典拠の時代性の違いに影響されたためだと考えられる。中世期のクルアーン注釈書には、男性優位の考え方が埋め込まれていた一方、近代以降、男女間には優劣ではなく、役割の違いがあるという解釈が広がっていったからである³¹⁾。

日本ムスリム協会訳の「(それ以上の) ことをしてはならない」には訳者注11として、次のような言葉が添えられている。「われわれは、つねにアッラーのみ前であることを、意識して生活しなければならない。アッラーはわれわれの上に高くおられ、監視しておられるのである。アッラーにおいては、その悩みや口論は、本当に取るに足りないものであろう。それで他人に対する感情やうるさい小言や皮肉は、事が過ぎたら過まちとして許し忘れるべきである³²⁾。」ここからも、クルアーンの言葉を現代の人々の日常に結びつけようとする訳者らの姿勢がうかがえる。

4. 翻訳の「可能性」

以上、井筒訳『コーラン』と三田訳『聖クラーン』／日本ムスリム協会訳『聖クルアーン』について、その翻訳の意図や過程、その結果としての訳文の「幅」を見てきた。そこで明らかになったのは、次の三点である。第一に、クルアーンの翻訳には本文内容の理解や表現上の困難、複数の解釈可能性があるということ、第二に、翻訳者は、翻訳の過程で、先人による成果を参照したり、専門家らの協力を得たりしていること、そして、第三に、翻訳者らは自らの翻訳に（正確さという点で）限界が

あると自覚していることである。これらを理解した上で、『コーラン』や『聖クルアーン』と題する書物を参照したり、引用したりすることは、クルアーンをめぐるリテラシーの基本と言えるであろう。

本稿では、紙幅の都合もあり、二つの翻訳書だけを検討してきたが、同様のことは、他のクルアーンの日本語訳についても指摘しうる。いずれも、訳者をはじめ多くの人々の主観的な判断や取捨選択の積み重ねの結果、生まれたものである。では最後に、この「主観」という側面について、もう少し考えてみたい。

近年、世界各地のムスリムの間で、かつてないほど多様なクルアーンの読み方が提示されている³³⁾。米国のイラン系研究者ラーレ・バフティヤールによる『崇高なるクルアーン (*The Sublime Quran*)』³⁴⁾もその一つである。同書の中では、前出の4章34節が以下のように英訳されている。

Men are supporters of wives because God gave some of them an advantage over others and because they spent of their wealth. So the females, ones in accord with morality are the females, ones who are morally obligated and the females, ones who guard the unseen of what God kept safe. And those females whose resistance you fear, then admonish them (f)³⁵⁾ and abandon them (f) in their sleeping places and go away *from* them (f). Then if they (f) obeyed you, then look not for any way against them (f). Truly, God had been Lofty, Great.

(強調は原文による)

引用者による試訳

男性たちは妻たちの支援者である。神が一方に他方よりも有利な点を与えたからであり、彼らが財産を費やすからである。よって道徳的に正しい女性とは、課せられたことに従う者たちであり、神が大切にしてきたものを守る者たちである。あなた方が抵抗をおそれる女性に対しては、諭し、寝床に放置し、そのもとを立ち去りなさい。もし彼女たちがあなた方に従えば、それ以上のことをしないよ

うに。本当に、神は高く、偉大であられた³⁶⁾。

バプティヤールによる翻訳は、たとえば、「supporters／支援者」、「advantage／有利」や「go away from them／そのもとを立ち去りなさい」という表現において、井筒訳や日本ムスリム協会訳と異なっている。とくに最後の「そのもとを立ち去りなさい」と訳出された部分は、井筒訳では「打擲を加えるもよい」、日本ムスリム協会訳では「これを打て」と翻訳されている。これはバプティヤールが、これまで一般に「(妻を)打つ」と解されてきたアラビア語の一文を、アッラーがそのようなことを言うとは考えられないという訳者なりの理解や感覚を大切にしつつ、熟慮を重ねて導き出した表現である³⁷⁾。

バプティヤール訳は、「女性による初めての批判的英訳³⁸⁾」を謳うものであったが、同様に、女性の視点や経験が、クルアーンの解釈において採り入れられてこなかったことを指摘し、それを変えていこうと呼びかける声が、英語圏のみならず世界の各地で高まりつつある。これまでの解釈にたずさわった者のほとんどが、伝統的な宗教知識を保持する、特権をもった男性で占められており、かれらの「主観」に基づく理解が基調となってきたとすれば、これからは、女性や性的マイノリティを含む、より多様な層の人々の理解や視点も取り入れつつ、クルアーンを読んだり、解釈したりすることが重要だというのが、その主張である³⁹⁾。

クルアーンの章句の意味を、第一章から最終章まで順番に、別々に解釈していくのではなく、クルアーン全体に込められた意図を明らかにし、ある啓示と別の啓示の関係性に注目しながら、神の言葉を理解すべきだという議論もある。たとえば、前述の4章3節「あなたがたがもし孤児に対し、公正にしてやれそうにもないならば、あなたがたがよいと思う2人、3人、または4人の女を娶れ。だが公平にしてやれそうにもないならば、只1人だけ(娶るか)(後略)」については、同じ4章の129節に以下のような言葉がある。「あなたがたは妻たちに対して公平にしようとしても、到底出来ないであろう⁴⁰⁾。」これら二つの啓示を合わせ置きながら、神の意図がどこにあるのかを考えるべきだということである⁴¹⁾。

クルアーン全体を通して、神が男女間の平等や公正、愛情に満ちた夫婦関係を求めていると強調されることもある。その際、以下のような章句が根拠の一部となる⁴²⁾。なお、ここでは訳文の内容やニュアンスの違いを示すべく、三つの翻訳（井筒訳、日本ムスリム協会訳、バフティヤール訳）を併記することにした。

すると神は彼らにお答えになった、「汝らの中の働き者（信仰にもとづいて善をなす者の意）がなしとげたことをわしは決して無にしたりはしない。男も女も分けへだてはしない。もともと（男女）お互い同士じゃ。（井筒訳、3章193 [195] 節の一部）⁴³⁾

主はかれら（の祈り）を聞き入れられ、（仰せられた）。「本当にわれは、あなたがたの誰の働いた働きもむだにしないであろう。男でも女でも、あなたがたは互いに同士である。

（日本ムスリム協会訳、3章195節の一部）⁴⁴⁾

And their Lord responded to them: I waste not the actions of ones who work among you from male or female. Each one of you is from the other.

引用者による訳

彼らの主は答えた。「男でも女でも、あなたがたのうち、働く者の行動を無駄にはしない。あなた方一人一人は、互いに由来している。」（バフティヤール訳、3章195節の一部）⁴⁵⁾

れっきとした神兆の一つではないか、お前たちのために、お前たちの体の一部から妻を創り出し、安んじて馴染める相手となし、二

人の中には愛と情を置き給うたとは。考えぶかい人間なら、これこそ有難い神兆よとさとるであろう。(井筒訳、30章20節[21節])⁴⁶⁾

またかれがあなたがた自身から、あなたがたのために配偶を創られたのは、かれの印の一つである。あなたがたはかの女らによって安らぎを得るよう(取り計らわれ)、あなたがたの間に愛と情けの念を植え付けられる。本当にその中には、考え深い者への印がある。

(日本ムスリム協会訳、30章21節)⁴⁷⁾

And among His signs *are* that He created for you spouses from among yourselves, that you rest in them. And He made affection and mercy among you. Truly, in that are certainly signs for a folk who reflect.

引用者による試訳

かれの徴の一つは、あなたがたのために、あなたがたの中から配偶者を創られたことである。またあなたがたの間に愛情と情けをもたらされたことである。本当に、よく考える者たちのための徴はその中にこそある。(バプティヤール訳、30章21節)⁴⁸⁾

いずれの訳文においても、神はよい働きをした者を性別にかかわらず評価すること、また神が配偶関係をつくり、配偶者間に互いへの愛と情の念を据えたことが、表現の違いこそあれ、示されている。

イスラームにおける男女間の平等や公正を信じるムスリムの中には、次のように主張する人々もいる。クルアーンに示された具体的な事柄では、しばしば男女間に差が設けられているが、それは、7世紀に啓示が下された当時のアラビア半島のムスリム社会では、そうした差のある状態が最善だったからである。しかし、神が意図したのは、そうした差を永遠のものとするのではなく、後の信徒たちが、それぞれの時代や社

会に応じて、最善で最適な状況や男女の関係性のあり方を考え、実践することであった、と。こうした人々にとって、クルアーンは逐語的に解釈すべきものではなく、一つ一つの章句に込められた意味の積み重ねにより、その精神を全体として理解すべきものなのである⁴⁹⁾。

以上、クルアーンの翻訳書を読む際に知っておくとよいと思われるいくつかの側面を見てきた。結論として言えるのは、ムスリムの手による翻訳であろうと、非ムスリムによるものでであろうと、それは数ある「解釈書」の一つの形に過ぎないということである。人間によるものである以上、「正確さ」にも「客観性」にも限界がある。他方、それが人間によるものだからこそ、そこに「幅」や「可能性」が生まれ、豊かな精神性の土壌となるとも言えるであろう。この点において、米国出身の黒人女性のイスラーム学者、アミーナ・ワドゥード（1952年-）による次の言葉は示唆的である。「クルアーン解釈とは、結局のところ、人間による神の探求である。クルアーンは神の言葉であり、神の顕現だという根本的理解がある一方で、神という存在は決してテキストの中に閉じ込められるものではない⁵⁰⁾。」クルアーンの翻訳書（すなわち解釈書）を前に、読者は、そこに見え隠れする過去から現在までの人々の知的営為に触れるだけでなく、今後の人々の、さらなる「神の探求」にも思いを馳せることができるのである。

引用文献

-
- 井筒俊彦『コーラン』（全三巻）岩波文庫、1957-58年。
 ——『コーラン』（全三巻）岩波文庫、1964年。
 大川玲子『イスラーム化する世界——グローバルゼーション時代の宗教』平凡社新書、2013年。
 ——『リベラルなイスラーム——自分らしくある宗教講義』慶應義塾大学出版会、2021年。
 川橋範子「ジェンダー論的転回が明らかにする日本宗教学の諸問題——ウルスラ・キングとモーニィ・ジョイを中心に」（『宗教研究』93巻2号、2019年）、31-55頁。
 川橋範子・田中雅一「ジェンダーで学ぶ宗教学とは？」（田中雅一・川橋範子編『ジェン

- ダーで学ぶ宗教学』世界思想社、2007年)、1-17頁。
- 桑田禮彰『議論と翻訳——明治維新时期における知的環境の構築』新評論、2019年。
- 後藤絵美「日本におけるクルアーン翻訳の展開」(松山洋平編『クルアーン入門』作品社、2018年a)、125-173頁。
- 「クルアーンとジェンダー——男女のありかたと役割を中心に」(『クルアーン入門』作品社、2018年b)、389-413頁。
- 「邦訳クルアーンとジェンダー——無意識の伝統主義」(『ジェンダー研究』21号、2019年)、157-169頁。
- 「現代の女性たちとイスラーム——クルアーンとの向き合い方」(『国際宗教研究所ニュースレター』95号、2021年)、11-12頁。
- 「男女間の「平等」をめぐる」(『東京外語会会報』154号、2022年)、26-27頁。
- 「ジェンダー平等を求めて——1920年代のレバノンにおける宗教改革運動」(長沢栄治監修、岡真理・後藤絵美編著『記憶と記録にみる女性たちと百年』(イスラーム・ジェンダー・スタディーズ5、明石書店、2023年a、48-60頁)。
- 「変容する宗教文化——啓典解釈と女性の装い」(長沢栄治・後藤絵美編『東大塾現代イスラーム講義』東京大学出版会、2023年b)、219-241頁。
- 小松加代子「宗教とフェミニズム・ジェンダー研究——普遍性へのジェンダー批判」(『湘南国際女子短期大学紀要』12号、2005年)、45-58頁。
- 鈴木絢司「『日本ムスリム協会』歴代会長列伝」(飯森嘉助編『イスラームと日本人』国書刊行会、2011年)、155-186頁。
- 中村廣治郎『イスラームと近代(叢書現代の宗教13)』(岩波書店、1997年)。
- 「コーランと翻訳」(若松英輔編『井筒俊彦さんまい』慶應義塾大学出版会、2019年)、138-143頁。
- 日本ムスリム協会『日亜対訳注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会、1982年。
- 『日亜対訳注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会、1996年。
- 松山洋平「クルアーンの構成」(松山洋平編『クルアーン入門』作品社、2018年)、99-122頁。
- 三田了一『日亜対訳注解 聖クララン』日訳クララン刊行会／世界イスラーム連盟、1972年。
- 森本武夫「聖コーラン日訳の歴史」(『アッサラーム』9号、イスラミックセンター・ジャパン、1977年)、50-57頁。
- 山折哲雄「井筒訳『コーラン』の文体」(若松英輔編『井筒俊彦さんまい』慶應義塾大学出版会、2019年)、144-146頁。
- Bakhtiar, Laleh, *The Sublime Quran: English Translation*, Chicago: Kazi Publications,

2007.

- Goto, Emi, “Inscribing ‘God’s Words’ in Japan: Connecting the Past to the Present through the Translations of the Qur’an,” in: *Knowledge and Power in Muslim Societies: Approaches in Intellectual History*, eds. by Kazuo Morimoto and Sajjad Rizvi, Berlin: Gerlach Press, 2023, pp. 391–414.
- Mir-Hosseini, Ziba, Mulki Al-Sharmani, Jana Rumminger and Sarah Marsso eds., *Justice and Beauty in Muslim Marriage: Towards Egalitarian Ethics and Laws*, London: Oneworld Academic, 2022.
- Pink, Johanna, *Muslim Qur’ānic Interpretation Today: Media, Genealogies and Interpretive Communities*, Sheffield / Bristol: Equinox, 2019.
- Robson, J., “al-Baydāwī,” in *Encyclopaedia of Islam*, New Edition, ed. by H. A. R. Gibb et al., Leiden: Brill, 1960–2009, vol. 1: 1129.
- Wadud, Amina, *Qur’an and Woman: Rereading the Sacred Text from a Woman’s Perspective*, Oxford/ New York: Oxford University press, 1999.
- , *Inside Gender Jihad: Women’s Reform in Islam*, Oxford: Oneworld, 2006.

注

- 1) たとえばクルアーン 12 章 1、2 節。クルアーンの日本での翻訳に関しては、すでに何度か論じたことがある（後藤 2018a、2019、Goto 2023）。本稿にはこれらの論文と重なる部分がある。
- 2) 桑田 2019、244–245 頁。
- 3) 井筒 1957–58、上巻 305 頁。
- 4) 同上、306 頁。
- 5) 同上、307 頁。
- 6) 同上、3–4 頁。
- 7) 初版下巻の解説には次のようにある。「口語訳を試みた僕の第一の願いは、『コーラン』^{ヒューマン・ドキュメント}というこの聖典を、何よりもまず一個の生きた人間記録として広く一般の読書人に提供して見たいということであった。いかめしい鎧をつけた聖典に表口から近づくのではなく、マホメットという魁偉な人間のこの世に生きた記録として、いわば裏口から、彼の人間性の側面から、この聖典を把握して見たいと思った。」（井筒 1957–58、下巻 345 頁）。『コーラン』の文体については、山折 2019 も参照されたい。

- 8) 井筒 1957-58、下巻 345 頁。
- 9) Cf. Robson 1960-2009. 井筒自身、『コーラン』のはしがきで、バイダーウィーの注釈書が「ザマフシャリー系統の代表的な註釈」であると述べている（同上、上巻 4 頁）。
- 10) この点について、イスラーム研究者の中村廣治郎は以下のように述べている。「要するに、井筒の狙いは、イスラームの伝統とドグマを通して理解されたムハンマドではなく、心臓の鼓動が伝わってくるような人間ムハンマドのありのままの姿を再現すること、コーランはそのための記録であり、したがってそれに必要な解釈の方法と文体で訳出する、ということである。そこから必然的に、方法としては[・][・]当時の人々がコーランのことばから理解した意味をとり出し伝える文献学的解釈、文体としては[・][・]当時の言語体系の中でのコーランのスタイルの再現、つまり生々とした会話体の口語ということになったのである」（中村 2019、141 頁）。
- 11) 井筒 1964、上巻 5-6 頁。
- 12) 同上、下巻 396-397 頁。
- 13) 同上、397 頁。
- 14) 同上、398 頁。
- 15) 三田の略歴については、森本 1977、鈴木 2011 を参照した。
- 16) 三田 1972、IV 頁。
- 17) 同上、VI 頁。
- 18) 同上、II 頁。
- 19) 同上、III 頁。
- 20) 井筒 1964。
- 21) 日本ムスリム協会 1996。
- 22) 井筒訳では「慈悲ふかく慈愛あまねきアッラーの御名において...」と、日本ムスリム協会訳では「慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において」とある。バスマラを含むクルアーンの構成については、松山 2018 を参照されたい。
- 23) 日本ムスリム協会 1996、92 頁。
- 24) ムハンマドに関わる歴史的な状況については、下巻の解説で示されている。ウフドの戦いに関しても下巻 388 頁に言及がある。
- 25) 井筒 1964、上巻 128-129 頁。
- 26) 日本ムスリム協会 1996、92-93 頁。
- 27) 同上、93 頁。
- 28) 井筒訳はフリューゲル版のアラビア語のクルアーンを底本としたため、現在一般に用いられているエジプト標準版と節番号が異なっている部分がある。
- 29) 井筒 1964、上巻 137 頁。

- 30) 日本ムスリム協会 1996、98 頁。
- 31) この点については、後藤 2018b、2019 を参照されたい。
- 32) 日本ムスリム協会 1996、98 頁。
- 33) これについてはたとえば、中村 1997、大川 2013、2021、Pink 2019、後藤 2023b 等を参照されたい。
- 34) Bakhtiar 2007.
- 35) アラビア語は三人称複数も男性形と女性形で形が異なる。ここでは **them** が女性形の三人称複数であることを示すための記号として (f) が置かれている。
- 36) Bakhtiar 2007, p. 76.
- 37) Ibid., pp. xiii–xlii.
- 38) Ibid., p. xix.
- 39) こうした動きの一端については、後藤 2023a で扱った。また、広く宗教学においても、男性の解釈（や翻訳）を当然視し、女性やその他多様な「差異の経験」をもつ人々を周縁化してきたことへの批判的考察が続いている。これについては、小松 2005、川橋・田中 2007、川橋 2019 を参照されたい。
- 40) 日本ムスリム協会 1996、114 頁。
- 41) 中村 1997、89–92 頁。
- 42) 同上、90 頁および Mir-Hosseini et al. eds. 2022, p. 25 など。
- 43) 井筒 1964、上巻 126 頁。
- 44) 日本ムスリム協会 1996、90 頁。最後の「同士」の部分には、三田による次のような訳注が付されている。「イスラームは、両性の対等の地位を認めるばかりでなくそれを強調し続ける。たとえば性の別があってもそれは自然の上の別で、精神上のことについては一切それを勘考しない。それで人為的な諸区別、たとえば階級、貧富、人種、生まれの差異などに対しては一層顧慮しないのは当然である。」(同上)
- 45) Bakhtiar 2007, p. 69.
- 46) 井筒 1964、中巻 325 頁。
- 47) 日本ムスリム協会 1996、493 頁。
- 48) Bakhtiar 2007, p. 386.
- 49) Wadud 1999, Mir-Hosseini et al. eds. 2022. この点についてはまた、後藤 2021、2022 でも指摘した。
- 50) Wadud 2006, p. 197.